

ろば



百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分
於 東京家政専門学校2階
聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
於 Zoom

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



私の目録（九四）

父を想う日々

田島 のぶ子

昨年二〇二一年の十月一日に、私の父笹淵昭平が他界しました。九二歳でした。今年六月一日には、賈先生の司式のもと百人町教会の教会墓地に納骨ができ、その翌日には祐教会をお借りして「笹淵昭平の思い出を語る会」を無事終え、生前の父を知って下さっている懐かしい方々と再会の時に恵まれ、父との思い出の貴重な言葉に触れることができ感謝でした。

私が父との思い出で、特に印象深く思いだすのは、一九八二年から八三年にかけて一年間のことで、その年は父が五三歳、農村伝道神学校を退職し牧師になる決意をした年のことです。父は牧師になる試験のために約一年間失業保険をもらいながら家において聖書を学んでいました。

私は当時一歳でしたが、父の人生の大きな決意に触れ、子どもながらに驚いたことを覚えています。またその年の五月三日の憲法記念日のことです。父は私を部屋に呼んで、「日本国憲法」という冊子を手渡し「これから毎日一条ずつお父さんと一緒に憲法を読みましょう」と言っていて、その夏は父の部屋に毎日呼ばれて憲法を百三条学びました。当時は毎日のその時間が苦痛でしたが、はじめて知る憲法、それが示して

いる象徴である天皇制のこと、戦争放棄のこと、基本的人権のこと、一言一句を丁寧に父と一緒に読んであの穏やかな貴重な時間、あの八二年の夏は良き思い出です。

その後、父は牧師となりましたが、父の説教の中で「穏やかな声、特に「イエス様はいつも弱いものの味方だった」という言葉が、私の中では一番の大切な記憶となっています。父は特に牧師になってから一貫して、その「弱いものの味方であるイエス様の生き方」を、この現代でこだわっていたように見えました。その姿は、母が父の告別式の後に「昭平さんは自分のことは何も望まず、愚痴を言わず、人をゆるす人でした」と言っていた正にそれで、今となっては父に「どうして」「教えて」と直接尋ねることもできませんが、父の信仰による決断の強さを、父のこだわりを、私も知りたいたいと思う日々です。

最後になりますが、納骨の際、賈先生が父の写真の横に坂敬夫さんの御写真をそとと並べて下さったとき、涙が止まりませんでした。父の生き方を心より理解し、交わり、祈って下さいました賈先生に感謝します。そして私が幼い頃から（生まれる前から）の百人町教会の父の信仰の友人でありました皆様、いつも私の中の父の姿を通して、皆様の祈りを感じています。心より感謝申し上げます。

魚の腹の中で

ヨナ書二・一―一

賈 晶淳

ヨナ書一章はヨナが神の指示に逆らい逃亡する話で、二章はその海に投げ込まれたヨナを呑み込んだ大きな魚の腹の中での話です。今回は二章をもとに一章の話にも戻りつつお話をしたいと思います。ヨナは神から逃れるつもりでしたが、その道は平たんなものではありませんでした。一章の終わりにヨナは船員たちに自分を海へ投げ込むように頼みます。厳しい選択だったと思いますが、自殺というより祭儀的な意味が考えられます。いわば贖いの犠牲です。ヨナは大荒波で船乗りや乗客を危険に晒した原因が自分にあることを先ず認め、その後船上の人々を救うための犠牲として自分を差し出しているのです。自分の過誤を認め、自ら責任を負おうとしていたのです。もしヨナが自分の保身だけを考え、その状況を無視し続けていたら、結局は荒波の中へヨナ自身はもちろん、乗船していた全ての人々が船と共に海の底へ沈むことになったでしょう。ヨナは二ネベを救うための道を拒否しましたが、船上での出来事は自らの命を捨てて人々を救うことだったのです。このことはヨナ書を理解する重要なポイントです。

二章の物語は神話のような展開になっています。ヨナは巨大な魚に呑み込まれ命を救われます。あり得ない展開で読者は戸惑うかも知れませんが、気がなる方は発想を変え、荒波の中に船員が出てくれた舵もない救命ボートに一人で乗せられたと思えば良いと思います。魚の腹の中で独りぼっちになっていることと救命ボートに一人で乗っていることが天涯孤独であるのは同じでしょう。ただ魚の腹の中は真つ暗な闇で、身動きもできなかったと思います。祈りに集中することだけではできませんでした。息苦しいところだったかも知れません。代わりには匂いで息が良く確認でき、救命ボートより揺れない場所だったかも知れません。この魚の腹の中で一番変わったのは神が舵を取るようになったことでしょう。それまでヨナは自分で舵を取ろうとしてみましたが、神の介入もあり、今はそれを神に返し、全てを神に委ねようとしているのです。

御前から追放されたのだと。生きて再び聖なる神殿を見ることがあるうかと。大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。

二章の内容はヨナの祈りとして記されています。魚の腹の中は外の世界とすべてが遮断された空間、ヨナは自分が生きているのを確認した安心感より、その先どうなるかという不安感を覚えたかも知れません。三日三晩の昼夜も分らない中、落ち着くようになり、それまでの道程を振り返る余裕もできただし。祈りの中でヨナは神と自分に再び向かい合うようになります。

聖書の預言者は常に孤独な存在でありました。預言者は絶望的な状況の中で選ばれ、神の声を聴く者となります。聖書には神が絶望の中にいる人々の叫び声、うめき声を聴いたという話が何度も出ています。預言者となる人も自らのうめき声をあげていたと思います。神の声と、人々の声と、預言者自身の声が一致するところに啓示を感じていたと思います。私たちも今、大地のうめき声を聴いています。詳しい報告や説明が無くて私たちがその声を肌で感じています。二節と三節です。

ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと、

主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると、わたしの声を聞いてくださった。

声を聴くのも重要ですが、より大事なのは声に応えることでしょう。八節にはヨナの叫びに神が応えたと記されています。

息絶えようとするとき、わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き、聖なる神殿に達した。

祈りとは神への一方的な願いではなく、神との対話だと思えます。そして、祈りの時はヨナが祈っていた魚の腹の中が神殿になったように何処も聖なる時空へと変わります。何にも見えず、何処にも逃げられない魚の腹の中は神と対面する最適な時であり場であったのです。その時、ヨナはそれまでの心の重荷を下ろし、神と自分に向き合うことが出来たのです。しかし、現代人は豊富な知識と経験を持ち、あらゆる面での能力も持ち、多忙に過ごしています。当然のことですがそのような営みの中では、神と他者からの声だけでなく自らの声にも耳を傾けることがなかなか難しいです。

また、人類は文明の発達で生活がとても便利になり、将来に希望もあるという思いで過去してきました。しかし、今はその楽観論が消えつつあり、不確実性の中で生きるように

なりました。パンデミックの中での今の世界

とは、魚の腹の中でヨナが置かれた状況に似ていると思われませんか。この二年以上の間に人類は目に見えないウイルスの恐ろしい感染力の前で無能な存在でした。ただ、ひたすら不安と心配と恐怖と闘うばかりでした。戦争や大地のうめき声もあちこちから聴こえてきます。しかし、それにも応えることができないうままにいます。思えますのは地震や台風のような轟音の時より、パンデミックや気温変化のような静音の時の方がさらに深刻です。その意味で、今が祈るべき時だと思っています。うめき声はまだ小さいですが祈れる最後のチャンスかも知れません。今の静かなうめき声が轟音となる時はもう遅いかも知れませんが、今こそ人類は省みて正しい方向へと舵を切る時だと思えます。

憂慮すべき状況はその舵を取る存在が今、見当たらないことです。政治家や知識人、国や国連でも預言者的存在は見えません。国連の機能も大分弱くなり、G7とかG20という主要国のグループを作りましたが、影響力は殆どありません。それで今をG0（ゼロ）の時代だという人もいます。ヨーロッパ連合を始め、アメリカや中国などに対する期待も全くできない状況です。分裂だけが拡大され

つつあります。

一章の話に少し戻りますが、荒波による不安と絶望の中で船員たちが取った行動がとても印象に残ります。緊急時に対応する姿です。船を軽くするために大切な荷物を海に投げ捨てます。船上の人々を集め祈らせることで人々を落ち着かせ、心一つにさせます。くじを引きヨナに当たりますが、その選択が正しいものかを確認します。一章八節です。

「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいだ。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。

ヨナが大嵐の原因であることを確認した後、船を陸に戻そうと努力します。それができないことが分かり、ヨナを海に投げ込む時は自分たちの行いに対する赦しを求めます。これらの船員たちの行動はとても感動的なもので、世界と私たちが見習うべき姿勢ではないかと思えます。

二章での結論は一〇節の「救いは、主にこそある」です。ここで「主」とは救いに向けての一致を表す象徴概念でしょう。今こそ、人類は落ち着いて救いの道を共に祈る時だと思えます。今こそ、私たちは舵を切る時だと思えます。（二〇二二年九月四日証詞より）

第一回「未来委員会」報告

未来委員会幹事会

百人町教会も設立から五〇年が経ち、会員の高齢化や、礼拝の場の確保などの問題に直面しています。さらにコロナ禍に襲われ、否応なくズームによるリモート礼拝に移行しました。このような背景から、今年の総会で「未来委員会」の設置が決まりました。「未来委員会」の目的は、高齢化や礼拝の持ち方など、これからの教会の在り方を考えることです。また私たちがこれまで共に積み上げてきた教会形成について改めて考える機会にしようということになりました。構成員は教会員全員、運営は五名の幹事会（石田美智代・泉谷五十鈴・空閑厚樹・小島悦子・高瀬礼子）です。

第一回「未来委員会」を七月十七日の礼拝の証詞の時間にもち、二年前に行った五〇周年アンケートを基に「教会員の証詞」「昼食（共食）のありかた」について話し合いました。

○証詞について

アンケートには「教会員の証詞は続けたいが、自分が証詞をするのは負担」という声が多くありました。そこで、幹事会から「読書会という形の証詞もアリでは」と提案したところ、「礼拝は礼拝としてきちんともちたい。読書会が礼拝といえるのか」という問題提起

がありました。これに対して、「生きていることそのものが信仰の表れであり、読書や映画の話も信仰に繋がる」「神の介在を感じられるものであれば証詞たり得る」という考えが出されました。さらに、キリスト教の信仰を持たない人をゲストに呼ぶことへの疑問も出されました。これには、ゲストの活動に神の働きを感じるのであれば、紹介者が「介在者」としてゲストと教会員を繋ぐのだ、という考え方が紹介されました。

○昼食（共食）のありかたについて

アンケートでは、礼拝の時間に昼食を共にすることについて「礼拝時間が長くなる」「本来の意味が保たれているのか」という批判があります。「応答の時間を確保するためにも必要」「礼拝中の昼食は聖餐式であるという考え方に賛同する」という肯定的な声も多くあります。現在、月に二回ズーム礼拝を行っています。現在、月に二回ズーム礼拝を行っています。月には二回ズーム礼拝を行っています。月には二回ズーム礼拝を行っています。月には二回ズーム礼拝を行っています。

未来委員会設置までの経緯

百人町教会の歴史を見ればわかるように、「共に教会を形成してきたこと」は私たちが誇る伝統です。しかし、かねてから提起されている高齢化等の問題については、コロナ禍もあり、中々深めることができていません。

昨年七月の証詞で賈牧師が「五年以内に退任する」と発言されました。大きな衝撃の中、賈牧師から教会の今後を考える場として「未来委員会」設置が提案されるまでの私たち教会員は、主体的に問題を直視することができませんでした。ここに至って、私たちは「教会員自らによる教会形成」を目指さなければならぬことに改めて気づかされたのです。教会の在り方を主体的に考えるその先に、賈牧師退任後を含めた教会の未来が見えてくるはずでした。

「未来委員会」は年に二、三回開催する予定です。次回は、引き続き五〇周年アンケートの「今後について」の項目を話し合います。「未来委員会」を構成するのは、百人町教会のメンバー全員です。これからは、活動内容を「ろば」誌上で随時報告し、礼拝に参加できない方々と共有したいと考えています。ご感想やご意見などを郵便・電話・ファクス・Eメールなどで、ぜひぜひお寄せください。

心を癒す

増田 滋

高齢者になって運転免許返納になる前に存分にクルマに乗っておきたいとタクシードライバーの職について早八年。この仕事思ったより凶太い神経をしていないと務まらない。事故やトラブルに巻き込まれないように例えどどちらが優先かなどに関係なくとにかく危ないと思ったら相手に道を譲る、運転に慣れないクルマ（他府県ナンバーやレンタカー、サンデードライバー）、そして凶暴なクルマには決して近づかないなど徹底した防衛運転が要求される。それでも煽られたり理不尽にクラクションを鳴らされたりと腹の立つことが多い。自転車なんかは四方八方からミサイルのように突っ込んでくる（ちなみに皆さんは無暗にクラクションをならしてはいけないと法令で定められていることをご存じだろうか）。さらにお客への対応にもとても神経を使う。怒りを感じた時の対処法として会社で教わったのは、いわゆるアンガーマネージメントというもので、これは怒りに任せて反応する前に深呼吸して六秒間待つという方法。これもある面で有効ではあるけれど決して万能ではない。

どうすることもできない怒り。「あらゆる人

知を超える神の平安（フィリピの信徒への手紙四・七）とは程遠い怒り。さて、どうしたものか：。

「投影が知覚を作り出す。：それはあなたの心の状態を証しするものであり、内的状況の外的映像である。」（奇跡講座テキスト二一章序より抜粋、加藤三代子・澤井美子訳）

ほとんどすべての人がその人の無意識にある罪悪感、怒りを外に投影する傾向があつて、しかもほとんどの人がそのことに気づいていないというのが心理学の鉄則なのだそう。つまり、クラクションを鳴らされたというのは事実であつてもその先の「こんちくしょう」と反応するのは私の無意識の投影ということになる。そしてその無意識の中身というのはキリスト教的に言うならば原罪。「私は神から分離できると思つて神との一体性を否定し個人という自分を確立した。神が怒つて私を殺しに来る前に逃げよう。そして可能ならばやられるまえにやり返そう。」ここから罪悪感と得体のしれない恐怖が生まれる。これが怒りの起源である。攻撃と防衛、こんな精神力動が私をそしてこの世界を形作っている。本当の意味でこのことに気づき心が癒されない限り攻撃、防衛というサイクル、そして投影を回避することはできない（こんちくしょうが繰

り返される）。

「もしも、怒り、攻撃衝動、何らかの形で表れる愛の欠如といった自分の間違いを正当化するために知覚を用いているなら、私たちは邪悪さ、破壊、悪意、羨望、絶望の世界を見ることだろう。こうしたすべてを赦すことを、私たちは学ばなければならない。：：同時に私たちは自分自身をも赦し、歪曲された自己概念を超えて、神が私たちの内に、私たちとして創造した自己を見る。」（奇跡講座前書きより）「赦しは、兄弟から自分に為されたとおあなたが思っていたことは、起こつてはいなかったと認識する。罪を赦すことで、それを実在のものとして扱うのではない。罪は存在していなかったと見るのである。その見方において、あなたの罪のすべてが赦される。」（奇跡講座ワークブック第二部赦しとは何かより）

外には何も無い。私たちが知覚するものすべては自身の心の中身。他者や社会を変えようとしてうまくいかない原因もここにある。そして心の平安への鍵もここにある。

毎日、こんなことを考えながら、そして、とても難しいが赦しを実践しながらタクシールを運転している。私たちの心が癒されますようにと祈りながら：。

だれでも食堂 ゆらり

佐藤 かよ子

近頃小平市は、都心に一番近いプチ田舎との触れ込みで紹介されています。私はここで子育て、孫育てをして半世紀が過ぎました。その間に公共施設を利用する機会も多くありました。市内には一ヶ所の公民館がありました。それぞれの公民館には事業企画委員会があり、その目的は公民館を地域のコミュニティ作りの拠点とするために地域のリーダーと継続的に繋がり、住民の意向を適切に反映した講座などを企画することです。私は二年前から小川西町公民館の企画委員になりました。現在いろいろな所属、組織からのメンバー一六名で構成されています。企画シートを持ち寄って意見交換を行い、全員で企画を作成、市報で情報提供して参加者を募り、殆どの講座がサークル化しています。

昨年二〇二一年子育て支援講座を開設して名称を「地域で子育て・地域でできる子育て支援」として各講師を招き五回の講座を実施しました。講師からは、最近の子どもの状況、抱える悩み、子どもとの接し方、更に、実際に市内で取り組まれている先進的事例などを学びました。講座終了後、受講者の九名が中心となり、学んだ成果を活かすべく実践に向

けた話し合いを続けてきました。その結果、子どもだけでなく地域の誰もが利用して交流できる「だれでも食堂ゆらり」が誕生しました。毎月第一日曜日、午前十一時三〇分から午後一時三〇分までとして前半三〇食、後半三〇食大人三百円、中学生以下無料と決めました。

二〇二二年春のオープンに向けて会則、保健所への届出、衛生管理、今後の助成金申請など様々な作業を多くの方のアドバイスを受けながら進めてきました。市内の公民館の講座の中から地域に直接貢献するサークルの誕生は初めてのことで、他の公民館からも高い評価を受けて強い後押しを頂きました。公民館の周辺には高齢者住宅、包括支援センター、通所の障がい者センター、特別支援学校、国立精神神経医療研究センターと多くの施設が立地、日常的に関わり合う地域性があります。

地域の誰もが集える場所となるようにスクールソーシャルワーカー、ケアマネージャー、生活相談員、民生・児童委員との連携を心がけています。その後、思いを共にする仲間も増えて現在は一五名となりました。男性が二名で、そのうち一人は元調理師なので心強い限りです。地域の方々の寄付金、物品の提供などたくさんの協力のもとコロナ対策をして、

四月三日に関係者を招いて試食会を開きました。本番の前に予行練習をしてそれぞれの役割分担を決め段取りを確認しました。このスタイルは暫く続ける予定です。五月、六月、七月と三回が過ぎましたが、毎回誘い合っ来て下さる高齢者、部活の仲間、サッカー少年親子、赤ちゃん連れのファミリー……これからもたくさんのお会いが楽しみです。七月に入りコロナの感染拡大のため八月の実施について話し合った結果、休会と決めました。今までの利用者名簿から知人には個別に中止の連絡をして、当日は会場でスタッフ三人が対応することにしました。まだまだ先のことですが、今は控室や食後の談話室として利用している和室で昔遊び、読み聞かせ、学習支援など活動の幅が広がっていくことを願っています。「だれでも食堂ゆらり」は私たちスタッフの大切な居場所でもあります。



選択的夫婦別姓の現在地

高島 紗綾

二〇一八年に始まった四つの選択的夫婦別姓に関する裁判は、今年三月までに結果が出ました（簡単にまとめると、①海外での別姓法律婚が戸籍に反映されない↓東京地裁で海外での別姓法律婚は国内でも有効と実質的な勝訴。②別姓での事実婚が同姓での法律婚かしか選べない↓最高裁で合憲決定（違憲意見あり）。③子連れ再婚で子の姓のことを考えていない↓訴えが認められず。④経営者としての不利益、社会的損失↓③同様）。この間、国政選挙でも選択的夫婦別姓や同性婚が選挙の争点として挙がるようになり変化を感じます。特に若い世代にとっては、ジェンダー平等や気候変動は大きな関心事となっていますが、現在の人口構成（有権者の年齢層）と合わせるとときに、メイインシューになっていない現実もあります。

コロナ禍において、特に女性の就業や生活は大きな影響を受け、女性が抱える貧困・困難さが可視化されました。それは、制度あるいは、社会や実質生活においてジェンダー不平等が存在することの証しだと思います。

内閣府が今年公表した男女共同参画白書では、家族や人生が多様化している実態に対し、

人々の意識や制度は高度経済成長期のままであり、「もはや昭和ではない」と表しました。今や、単身世帯が三八%、夫婦と子供の世帯が二五%、夫婦のみの世帯が二〇%とのこと。

白書内では、結婚の意思なしと回答した人は、二〇代と三〇代の男女別で一四%〜二六%となり、積極的に結婚しない理由の一つとして、「名字・姓が変わるのが嫌・面倒だから」と回答した人が女性では五割だったとのこと。

同じく内閣府が今年公表した家族の法制に関する世論調査では、「選択的夫婦別姓制度を導入した方がよい」とした人の割合が前回調査より減ったとされました。今回の調査では、夫婦の氏に関する設問の前に、「夫婦の間の子どもにとって好ましくない影響があるとの意見の中には、次のような意見があります。が、影響があると思うものを選んでください。」として、「家族の一体感が失われて子の健全な育成が阻害される」「名字・姓の異なる親との関係で違和感や不安感を覚える」「友人から親と名字・姓が異なることを指摘されて、嫌な思いをするなどして、対人関係で心理的負担が生じる」という選択肢が示されました。ここにみなさんは何を思うでしょうか？

なかなか、選択的夫婦別姓が実現しない現実に対し、SNS上では、そんなに同姓がよ

いのなら原則、妻の氏にとしたらよいのではないかと、そうすれば、改姓をしなくてはいけない側から、選択肢を求める声があるのではないかと意見も出ています。

二〇二一年の最高裁の合憲決定後、報道は少なくなりましたが、今年七月に新たな裁判が始まりました。先述の①の続きです。海外での結婚が日本国内でも法律婚だとされましたが、二人が夫婦であることが戸籍や住民票に記載されていません。そのため、婚姻後の氏について、夫の氏と妻の氏にチェックした婚姻届を受理するよう家庭裁判所に申し立てを行いました。この裁判の行方によっては、日本人同士が日本で別姓での法律婚の道が開ける可能性があります。

選択制であるにもかかわらず、それを許容しない政治には、様々な事情をもつ一人一人が見えていないのではないかと思います。その人の背景に何があるのか、「普通」からはみ出る人たちのことを想像し、包括していく社会を創造する必要があるのではないのでしょうか？困っている、助けてほしいといえる人は、それだけで既に力があります。でも、声を出せない状態にある人が弱いとは限りません。「助けが必要な弱い人」にしておきたいのは誰なのか、考えたいです。

図書紹介

『叛逆老人は死なず』

鎌田 慧著・岩波書店

「アベ政治を許さない」と肉太の墨字で書かれたステッカーやワッペンを身につけ、脇のポケットから水筒を覗かせたりリュックを背負い、履き慣れたスニーカーにジャンパー姿の老人たちが、地下鉄「永田町」や「国会議事堂前」駅から地上に向かう。その流れに身を置きながら、著者は強く思う。…：秘密保護法、周辺事態法、集団的自衛権容認など、あたかも戦前の治安維持法下の亡霊が彷徨っているような、戦争に傾斜するグロテスクな時代を招くに至ったのは、我々老人が、平和の恩恵のなかに安閑と暮らしてきたからだ。その罪を思えば、少しくらい身体に無理をさせても、若者不在の空白を埋めていくのが叛逆老人の役割なのだ：と。

苦学の末にルポライターとなつて五〇年余、様々の闘いの現場に赴き、戦前を知る叛逆老人たちの覚悟に触れ、出会った人々の生き方を記し続ける中で、欲得なく名誉欲なく妥協なく問題に立ち向かつて人生を全うした人々の、眼光鋭い面影を想い、自分にそれができただろうかと自問する。

火炎放射器による火傷痕を負う身を車椅子に乗せて辺野古・高江に座り込む八七歳（二〇一六年当時）の島袋文字は、ありもしない嫌疑で名護署に呼び出されるが、口紅を差し赤いシャツを着て出頭し黙秘を貫いたという。

因みに、辺野古海上の測量槽にしがみ付いて機動隊の執拗な排除を受けながら非暴力闘争を続けたのも、還暦を過ぎて船舶免許を取得しカヌーを漕ぎ出したのも、高江へリパッド建設反対に早朝から座り続けたのも、その多くが老人たちだった。「叛逆知事」翁長雄志の言葉「うちなーんちゅ、うしえてー、ないびらんどー（沖繩人をないがしろにしてはならない!）」が生きている。著者はまた、石垣、宮古などをはじめとする八重山の島々に、新たな軍事基地が一方的に建設されていることに触れ、「あとは、ヤマトの私たちの歴史への関わり方だ」と沖繩の章を結んでいる。

「人は畑と海があれば食っていける」を哲学として、遂に電源開発の敷地計画を変更させ大間原発を実質的に動かなくさせた熊谷あさ子、鳴り物入りの「むつ小川原発」から「核燃料サイクル基地計画」に至るまで振り廻され続けた六ヶ所村の農民小泉金吾、「無核無兵」を謳った寺下力三郎元村長等のあらがいは、全国各地で、金に塗れた原発誘致に対して闘い続けている住民運動の歴史に重なる。冤罪や死刑、水俣や炭鉱労働などについても論及しているがここでは書ききれない。

今日も著者は、国会前で、新宿駅で、日比谷で、代々木で、地方都市で、「戦争させない」「さよなら原発」「辺野古米軍基地建設反対」「国葬反対」等々の呼びかけ人として、高齢の澤地久枝や、落合恵子、佐高信らと共に叛逆の声を挙げ続けている。（泉谷 五十鈴）

ろばのせなか

短い美竹教会生活からすぐ無牧の大久保集会に移った私にとって、笹淵昭平さんは父や牧師のような存在だった。百人町教会の土台を築いて下さった。のぶ子さん達ご家族からも深く尊敬されていたことを改めて思う。

増田さんによれば罪悪感と得体のしれない恐怖が怒りの元だという。プーチン大統領は正にそうかもしれない。権力を手にしても平安でいられる日はないだろう。だが、図書紹介にある、全国で闘う「叛逆老人」のエネルギーの源も怒りではないだろうか。こちらの怒りには、国民不在の政府のやりたい放題にはさせられないというりっぱな根拠がある。コロナ禍も三年目。どれだけ人と会う時間が減ったことか。人との出会いが大きな力を生む。佐藤かよ子さん達の活動を通して、きつと多くの人々が笑顔になることだろう。

別姓制度に関しては昨年高島紗綾さんに書いて頂いた。前進したところもあるが、なぜ日本はこんなに選択的夫婦別姓に抵抗があるのか。結局、政治家は多様性を認めようとならない反動右派に付度しているからだろうか。

百人町教会では、未来委員会として今後の教会のことを話し合うことになった。初期の「ろば」を読むと、理想の教会を目指し侃々がくがくの話し合いをしている先輩たちが見える。五〇年が経ち私達も皆高齢になったが、ろばなどの委員会に若い人が参加して下さる様になったことに希望を感じる。（小島 悦子）